

## 習俗と文化のダイナミズム

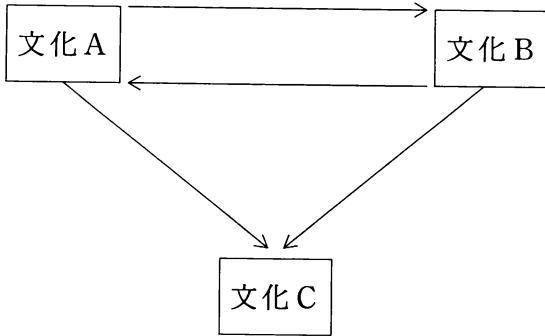
——稲荷ダキニ天像からみた異文化間における融合と相克——

現代教学研究室

現代教学研究室における仮説モデル

現代教学では、平成四年度の総合研究テーマ「密教と習俗」を受けて、一つの仮説モデルを設定することにした。文化というものが「ある共同体の成員が共通してもっている生活様式あるいは行動パターン」であるとすれば、その根底にはそうした共通する生活様式・行動パターンの基礎となるようなより素朴な精神性あるいは行動への志向性がなければならず、それを文化の原初形態としての習俗と捉えることができよう。謂わば、文化とは、反省され、洗練された習俗の体系として成立するのであり、その意味において両者は同一の地平線上にあると考えることができる。

しかし、ある文化Aの中にそれとは異質の習俗を背負った文化Bが入り込もうとする時、そこには両文化の融合と相克というプロセスを経て新しい文化Cが創出されるのではないかという仮説を左図のように立てた。



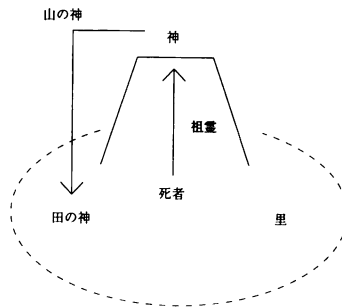
以上の仮説を考察する材料として、我々は日本文化の中から生み出された神様、稲荷神と、異文化からもたらされた神様、ダキニ天を取り上げることにした。なぜなら、この二つの神さまはまったく違った文化から現れた神様でありながらも、現在見られる稲荷神は、この両神が結合して形成されたものであるからである。この稲荷神信仰の形成過程を考察することは、まさに日本人が持つエートス、あるいは宗教観そのものにふれることであり、それはとりもなおさず上記の仮説を検証することに他ならない。

1、稲荷神は穀物霊であり、祖霊であること

民俗学でいわれているように、日本人における神概念というものは、死者の魂が祖霊となって、山に登っていき、そして年月が経つうちに祖霊は神となっていく。そこで山に登った祖霊は山の神となり、神となった祖霊は豊穰の神として田に下

つて子孫に実りをもたらすとされる。(図1)

図1



では稲荷神もこの日本人の神概念に合致した神様であろうか。

伏見稲荷の起源を記した『風土記逸文』には次のように記されている。

伊奈利というは、秦の中つ家の忌みき等の遠祖、伊呂具秦公、稲梁を積み富裕有りき、すなわち餅を用いて的としかば、白鳥と成りて、飛翔して山の峯に居り、伊禰奈利生いき、ついに社の名と為す。その苗裔に至り、先の過を悔い、社の木を抜き家に植えて禱のみ祭りき、今其の木を植えて蘇きは福を得、其の木を植えて枯れなば福あらず。

ここで見られる山の峯に降り立つた白鳥は、餅が変化したものであつて、それは穀物霊を象徴している。またそこで祠つた社の木を家にまつることは、祖霊を家に祠つたことが象徴されているのである。

また伏見稲荷社の神官であつた荷田氏の祖先であり、稲荷神とみなされる龍頭太伝説では、

和銅年ヨリ以来タ、既ニ百年ニ及フマテ、当山ノ麓ニイホリヲ結テ、昼ハ田ヲ耕シ、夜ハ薪ヲコルヲ業トス、其ノ面龍ノ如シ、顔ノ上ニ光アリテ、夜ヲ照ス事昼ニ似リ、人是ヲ龍頭太ト名ク、其の姓ヲ荷田氏ト云フ、稲ヲ荷ケル故ナリ（『稲荷大明神流記』）

この荷田氏の祖先と見なされている龍頭太伝説において、彼は、昼は田を耕し、夜は薪をわるを業とし、稲を荷なうことから荷田氏という姓が伝えられている。またこの龍頭太の姿を翁としている。このことから稲荷の性格として穀物神と祖霊（＝翁）のイメージがでてくる。

また、東寺所伝の伝説では、弘法大師が稲を担いだ老人に田辺のあたりで行き出会つた。その老人はかつて釈迦在世のときに、同じ説法の場に居合わせ、仏法興隆のために助け合うことを約束した仲であることが話された。そして老人は大師の守護神として、大師の仕事を手伝うことを確認したとされる。

その老人は後日、童を伴い、肩に稲を担いで弘法大師に会うために東寺の門に來たといわれている。

この弘法大師と出会つた老人は、他の伝説では龍頭太と云われている。そこには東寺と稲荷山との関連が示されているとともに、

稲を荷なう↓穀物神、翁↓祖霊神という関係を考えることも可能である。

さらに、桑椹子『狐と稻荷信仰』において、「全国には稻荷と名付く古墳が多数あり、『全国遺跡地図』に報告されているものだけでも二百基を越える。」と言われるように、古墳に稻荷の祀堂がまつられていることが多数みられることから稲荷神と祖霊神とが関連していることが理解できる。

## 2、狐は稲荷神の使獣であること

さて、稲荷神と切つてもきれない存在に狐がいる。この狐がなぜ稲荷神を表象し、あるいは稲荷神の使い獣なのか、そこにはいくつかの説がある。決定的な証明にはならないが、そのいくつかを提示してみたい。

まず狐が神の使いと見られていたのは、狐を命婦と称されることから窺える。

命婦とは、桑椹子（『狐と稲荷信仰』五来重編『稲荷信仰』721頁）も述べているように、もともと天皇や高貴な人々に仕え、世話をし、世間との仲介者的立場にあつたとされ、狐も同様に稲荷神に仕えるお使いとして見なされていたのであろう。

次に狐は専女とらめとも呼ばれている。専女とは稲魂を宿す女神、つまり稲女（とらめ）からきたものであるらしい（御倉神。専女也。保食神是也。『神道五部書』）。そして、狐にその名前が与えられるのは、取りも直さず狐が稲荷と関係があることを示しているのに他ならない。

さらに五来重は狐の古語が方言としてケツネという言葉が残っていることから、「ケ（食）ツ（の）ネ（根本霊）」であるとして、ケツネ、すなわち狐を「食物の根本」あるいは「食物を与える先祖」であると指摘している。

また、稲荷と古墳との関係について、先の桑椹子の説を示したが、狐と稲荷の関係を結び付けるもう一つの要因として、この古墳の存在がある。それは狐の習性として、岩の割れ目や、空隙の多い地域においてそれを利用して、また

そのようなものがない地域では丘陵斜面に穴を掘って棲むと言われている。すなわち古墳や墓地の穴は、狐にとつて絶好の棲家であつたのであると見られる。

そして、伏見稻荷山一帯にはいくつかの古墳が存在することから、稻荷山全体を大きな古墳群とみなされ、狐はその古墳を棲家として多く生息していたことが予想される。そこで狐は稻荷神の使いとして見なされる下地は十分ある。(山田知子「稻荷信仰と古墳」五来重『稻荷信仰』)

以上のことから狐は古来より、稻荷神の使い獣とみなされ、また逆に狐は稻の神として、山から里に実りをもたらす霊獣とされたのであろう。

### 3、ダキ二天と狐との関係

さて、五来重はフィールドワークから、稻荷神の祀堂にはダキ二天が祀られているところが多いことから、稻荷神とダキ二天の関係が深いと分析している。そこで稻荷とダキ二天との関係を考えていく前にダキ二天の性格を見ることがにする。

ダキ二天の性格について、『大日経疏』巻第十には次のように記述されている。

自在に呪術を為し、人の命が終わることを六カ月前に知り、その心(黄心臓の近くについているもの)を食う。もし、(その心を食べるならば)あらゆるところも一日で行き、望んだものはひとつとして得られないものはなにもない。

さらにインド密教の専門家である津田真一博士はダキニ天の性格を次のように説明する。

ダーキニーというのは、本来、大母神カーリーの使婢で、種々の魔術的な能力を有ち、人を害する恐ろしい鬼女で、・・・ダーキニーたちは、本来、男がうかつに近付くと、獲つて食われてしまう恐ろしい鬼女たちである。ところが、男がしかるべき手段を講じて彼女らを宥和し、許可されて喩伽して成就するなら、そこにおいて、悟りが実現する。(『世界』の愛) タントラにおける愛の節理 月刊アーガマ No.108,1990)

また、ダキニ天は、インドの土地神であるヤクシャを起源とし、一般的には恐ろしい存在であるとともに、恵みを与える豊穰なる神でもある。そして彼女(ダキニ天は通常女性である)の親分はカーリーであるとされる。(Margaret and James Stutley "A Dictionary of HINDUISM its Mythology, Folklore and Development 1500 B.c.-A.D. 1500" Allied Publishers p.66.)

そこでダキニ天の特徴としては、

1、人を害する魔物であること。2、呪術に巧みであること。3、神通力を持ち、ヤクシャ神として豊穰をもたらす。

以上がインドにおけるダーキニーの大まかな姿であると言えよう。

では、このダキニ天がどうして稻荷神と融合したのであろうか。この両神が融合するためには、どうやら中国の妖狐の存在が介在したと考えられる。そこで次に中国における妖狐とダキニ天について考察してみる。

中国の妖狐について『抱朴子』という書物に、「狐の寿命は八百歳で、三百歳を経て以後、人の形に変化できるよう

になる。また、夜には、尾を打って火も出す。人に化ける方法は、ドクロ（頭蓋骨）を頭の上に戴き、北斗七星を礼拝し、落ちないようにすると人に化けることができるようになる。」と言われる。また、狐は陰獣とみなされるが故に必ず女性に化けるとも言われている。

また、インドにおける後期密教に見られるダークニーは別名ヴァジュラヴァラーヒー（Vajravahini）と呼ばれている。このヴァラーヒーという言葉は豚女という意味であるが、豚のイメージが中国に至って野干として名付けられた可能性もある。

このように、中国の妖狐の特徴とインドのダークニーの特徴である、人を害し、呪術に巧みであるという共通性と、さらに豚↓野干↓狐というイメージが重なり合い、融合した後、日本に輸入され、ダキニ天像が完成されていたのであろう。

さらに、稻荷神とダキニ天が結合する一つの要因として、ダキニ天の乗り物である野干と狐のイメージが重なるとともに、その背後にはダークニーの豊穰性（ヤクシャは土地神であり、実りをもたらす。さらに豚は豊さの象徴性を有する）と稻荷神の豊穰性が一致した結果として、稻荷神の姿としてダキニ天が選ばれた可能性が高い。

つまりダキニ天自身が豊穰の神ヤクシャであり、また豚という多産のイメージと稻荷神の豊穰をもたらす要素とが一致するが故に、そこに両神のイメージが重ね合わせられたと考える良いであろう。

このように、インドのダキニ天が中国の狐（野干）像と重なり合って、日本に輸入され、そこで日本の神である稻荷神と結合されていったのであるが、この際、そこには異文化の融合と同時にあくまでも日本的な神様像への変容（変容することは、同時にあるものを選び取り、あるものを排除するという相克も生じていると考えられる）が見いだされるのである。



確かに、現在日本に見られる稲荷ダキニ天像とインドにおけるダーキニーの姿は大きく相違している。この両者の姿を比較するならば、インドにおける人間を食いつくし、凶暴なイメージから、非常に気品のある貴婦人の姿への変容が見られるのである。日本人にとって、ダーキニーの毒々しくおぞましい神の姿はどうしても受け入れ難かつたであろう。受け入れ難い姿ゆえに、日本人の気質に受け入れやすいようなダキニ天の姿に変えていったことが、このことによつて明確に知ることができるのである。

では、ここで問題となるのは、一つに、なぜ稲荷神はダキニ天というインドの神様と融合したのか。そして、そのことによつて日本人が持つ神觀念がどのように変化していき、また日本人が本来持っているところのメンタリティーになんらかの影響を及ぼしたのかどうかである。次節で考えてみたい。

#### 4、見えない神から見える神へ

先に掲げたように、日本人の神觀念は死者の魂が祖霊となつて山に登つていき、やがて祖霊は神となり、子孫に実りをもたらすものとされる。つまり日本人の神様が基本的には祖霊から生まれていとされる。さらに、日本人の神様の特徴として、八百万の神と言われるように、森羅万象さまざま自然現象に対して各々に神の名称を当てはめるのであるが、その神々に具体的なイメージを与えることがなかった。つまり日本人の神觀念の一つである稲荷神も同様に具体的なイメージをもつことがなかったのである。(ダキニ天と融合する前の稲荷神が老人の姿で現れるのは、老人Ⅱ祖先というイメージからくるものであろう。)

ところで山折哲雄は、もともとの日本の神は不可視の憑着現象にもとづくポゼッション (possession) 機能を有するものであり、それに対して仏教の神々は肉体性と個性を主張するインカーネーション (incarnation) 機能を有する

ものと指摘する。そして不可視の領域に身を隠していた日本の神々のパンテオンが、「仏教」との接触を通して「インカーネション」の原理をしいに受容するようになった、と言われる。(山折哲雄『カミーその変容と展開』岩波講座東洋思想 第15巻「日本思想」1岩波書店一九八九年)

確かに平安後期からいわゆる中世と言われる時期に到るまでの間、日本の神々は仏教の影響を受けて徐々に具体的な姿を獲得していったのである。さらに神々は姿を獲得するだけでなく、神を祀る方法(儀礼)、教理解釈(教義)、そして神々の世界を表現するために曼荼羅さえも仏教、特に密教がもたらしたところのそれら教義等を利用して、独自の神道を形成していったのである。

さて、何故に日本の神々は具体的な姿を獲得せざるをえなかったのか。本来あるべき日本の神観念、素朴祖霊信仰ではいけなかったのか。

日本の神々が姿を持ち、神道という教義体系が形成されてきたのは、どうやら平安末期から始まり南北朝には完成されたらしい。この時期に日本の神観念に変化が起きたとするならば、それは如何なる原因が潜んでいるのであろうか。

このころの日本の国家は、ちょうど天皇を中心とする律令国家が崩壊しはじめた頃である。

そこで、この律令国家の形成時期を念頭において、先の神観念の変化した時期と重ね合わせてみると、

律令国家の形成前 ↓ 素朴祖霊信仰

律令国家の完成 ↓ 天皇という神の形成と、仏教の導入及び展開

律令国家の崩壊 ↓ 神道(見える神)の形成

以上のように考えて見ればどうであらうか。

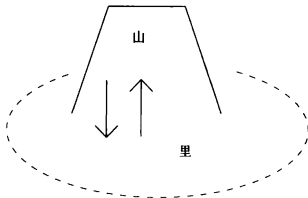


図2

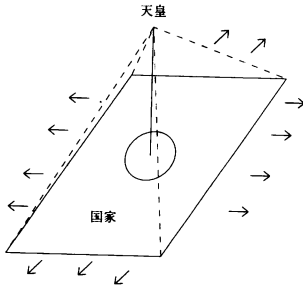


図3

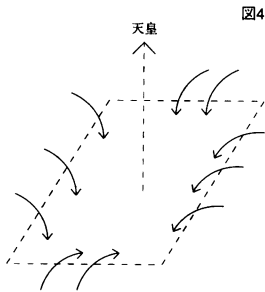


図4

大陸から律令制度が導入される前、日本においては里と山との境界は曖昧であり、そこには明確な里（コスモス）と山（カオス）の分離は見られなかった。すなわち人々は人間が簡単に立ち入ることができず、祖霊（神）が住む山に対してある畏敬の念をもちながらも、里（コスモス）に住む人々は山（カオス）の神々と常に交流をもつような親和的な関係であったと考えられる。（図2）

しかし、天皇を中心とする律令国家が成立していくと、おのずから里と山とは区切られるようになる。なぜなら、新嘗祭や大嘗祭に見られるように、天皇はこれまでの山から実りをもたらす神々（祖霊）に代わり、穀物を支配する稲の王となった。その天皇を中心とした国家が形成されていくということは、山の神々は、逆に天皇を中心としたコスモス（律令国家）を脅かす存在でしなくなり、そして、人々が日常生活において親和的であった見えないもの（カオス）が、まさに見えざるものとして周辺に排除されていったのであった。（図3）

天皇を中心とする国家は、周辺の支配できない世界（山）へ人々が向かうことを禁止し、食い止めようとする（それは私度僧の禁止等に見られる）。なぜなら彼らは天皇を中心とする国家（コスモス）に反逆する犯罪者に他ならないからである。

また、律令国家形成前においては、死体は家の近くに埋葬され、祖霊に対する穢れ意識はそれ程なかったようであるが、これも国家が形成されていく過程において、貴族を中心として、穢れ意識が高まり、死体は都市の周辺へと追いやられるようになったことを反映している。

その頃に河原者等に非人意識あるいは穢れ意識が高まっていくのも、国家が統治できない存在に対する、ある脅威を感じたがためではなからうか。

また仏教寺院は、国家体制に組み込まれる間は、国家の管理体制内にあり、また都市と山の境界にある寺院は一種の結界機能を持ち、常に山からくる、排除されるべき、見えざる日本の神々の力を食い止めていた。

例えば、『精霊集』巻第九に稻荷山が東寺の山として、東寺の建立に際して稻荷山から木材が切り出すことの記述があること。あるいは、稻荷神が弘法大師と会い、仏教の守護神となる誓いをしたことなどは、まさに、国家の周辺に追いやられた稻荷神を管理するために東寺が機能したことを示す一例となろう。

さてこの天皇を中心とした律令国家が平安末期から崩壊していくと、それまで排除されてきた神々は抑圧されてきた反動として、都市の中心に向かって流れだしてきたのである。もはや、国家は大陸から導入した文化装置では、その力を押えることができないが故に、それらの神々の力を受け入れ、逆に密教の教義等を借用し、見えない存在に形を与えて操作しようとしたのである。（図4）

いや、むしろそれまで抑圧されてきた日本人が持つ宗教的感性が表面に噴出してきて、その宗教的感性と外来文化が融合され、これまで外来文化の借り物的な宗教から日本独特の宗教が形成されて言ったのではないだろうか。

この排除されてきた神々とは実は、日本人の本来もつ神意識が表象されたものである。それまで外来文化に抑圧されてきたこの日本人の神意識が、律令国家が崩れていく内に、再び山の周辺部分から湧き上がってきたのではないか。この時期、高野聖等の浄土往生の流行は日本人が持っていた素朴祖霊信仰、すなわち死者は山に昇り祖霊神となる觀念と仏教の浄土思想とが融合して日本独特の浄土往生思想が出来上がってきたとも考えることができる。

また、この頃、引導法が成立してきたのも、死者の霊が山にうまく昇ってもらうためである。それは死者の霊が我々の世界から速やかに離れてもらうことによつて、人の死によつてもたらされる非日常的な穢れ観を浄化し、再び日常のコスモスを秩序づけるための装置ではなかつたのではなからうか。

ここに見られるように、日本人の神觀念は確かに大陸からの文化移入によつて、見えない神さまから見える神さまに変化していったが、その基本となる神意識は死者の魂が山に昇り祖霊神となつていくという素朴祖霊信仰自体は変化していないものと考えることができる。

以上の日本の律令制の成立と崩壊、そしてそこから湧き上がる日本人の神意識について考えてみたが、このことを稲荷神とダキ二天について考えてみる。

すでに述べたように、稲荷神は日本人が持つ宗教観、素朴祖霊崇拜からくる祖霊神の変化した神である。

それは、民俗学などで示されている山の神々のヴァリエーションの一つと見てよいであろう。

その日本にあつた本来の神が、大陸から律令制が取り入れられ、天皇という擬似神を中心とする国家が形成されることによつて、日本にそれまで崇拜されていた土着の神である稲荷神は国家の周辺に追いやられ、なおかつ仏教（東

寺)の管轄下に置かれてしまったのであった。

しかしながら、天皇を中心とした国家が崩れてくる平安末期から、仏教が持つ周辺(カオスの力)を結界する能力も同時に衰退するようになった。外来文化の力が衰えるにつれて周辺に追いやられた土着のエートス(神々||日本人の宗教感性)が吹き出してきたのである。その時、当時の人々はその力に対して大きな恐怖をいだき、また畏怖の念をもって、その力に対してなんらかの具象化を試み、新たな意味付けをすることによって、それらに再び表の世界での地位を与えようとしたのではなからうか。その地位を位置づけることによって日本人の心の根底に横たわる素朴祖霊崇拜の念がこの世界に現れ、安定されるのである。

さて、ではなぜ日本人の持つ素朴祖霊崇拜を象徴する稲荷神の具象化のために、ダキニ天が選ばれたのであろうか。それは先述したように狐を媒介とした稲荷神とダキニ天との相似からくるものであるかもしれない。さらに両神の豊穰性から来るものとも考えられる。

最初、稲荷神は翁の姿であった。それは先に触れたようにこの神がもともと祖霊神であったことを暗示している。しかし、中世になりダキニ天と結び付くと稲荷神の姿が女神になる。翁から女への変化は、そのままこの神の持つ豊穰性が母性という産みの象徴となる姿に変化したことになる。それは日本の祖霊神が持つ実りをもたらずという豊穰性を的確に表現するためには、ダキニ天という女神の姿こそ格好のものではなかったのではなからうか。

その女性性のもつ豊穰性と同時にダキニ天の持つマジカルな力(この力も女性の力を象徴したものである)が付与されて、現在に見られるような、大変人気の神様となったのではなからうか。

日本人にとっての神様とは、死者の霊が山に昇り山の神として、里の人間に実りをもたらず祖霊神と見てよいであろう。そして、その宗教観はいかなる時代においても、日本人の意識の根底に横たわっている。外来文化は、そこに

さまざまなイメージを付与していくが、この根底に横たわる宗教観は決して崩れることがないのである。

また稲荷神にダキ二天のイメージが付与される際、決してインドに見られるような毒毒しい、恐ろしいヤクシヤの姿を選びとるのではなく、豊穰性という女性のイメージとマジカルな側面を選択し獲得していき、そこに日本人の根底にある宗教意識を崩すことなく、まさに日本的なイメージを備えた稲荷神につくりあげていったと見てよいであろう。

参考文献

吉野裕子 「狐 陰陽五行と稲荷信仰」「ものと人間の文化史 39」昭和55年6月 法政大学出版局

直江広治編 「稲荷信仰」昭和58年3月 雄山閣  
五来重監修 「稲荷信仰の研究」昭和60年5月 山陽新聞社  
松前 建編 「稲荷明神」昭和63年10月 筑摩書房